



筑紫女学園大学リポジト

「現代文学大系」の編纂における台湾社会時代意識
の変化への一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/238

「現代文学大系」の編纂における 台湾社会時代意識の変化への一考察

石 其 琳

A Study of the Change in the Consciousness of Time in Taiwanese Society
as seen in Compiling “A Compendium of Modern Literature”

Kilin SEKI

はじめに

近年中国大陸の目覚ましい経済発展の影響で、台湾地区への注目が薄く、経済面において、日本との関係が依然として深いにもかかわらず、大きな事件でも起こらない限り、話題にされることも少ないようである。しかし台湾社会では、多方面において、住民意識の変化が見られ、歴史の苦痛な記憶から抜け出し、政治運営の試行錯誤を得ながら、新生の道を探り、変わろうとしている。本論は、三部の「現代文学大系」を研究の対象として取り上げ、その編纂主旨と約50年という歳月を範囲として、収集された作家と作品を検討し、これまでの半世紀をさかのぼり、台湾社会思潮の流変の実態を明らかにしたいと考える。「文学大系」を取り上げるということは、このような大規模な作品総集の編纂について、中国は古より伝承があり、文学史上、確定した位置づけをされており、極めて重要視されるのである。

中国は数千年の歴史累積により、豊富な社会知識、生産経験及び学術資料が多く存在している。七、八世紀の彫版印刷をはじめ、十一世紀に活字印刷があったにもかかわらず、歴代の政治混乱などの理由で、毀損、遺失された文献は数え切れないほどある。歴代の王朝は、文献資料保存のために国策として、時代ごとに重厚な文献類書の編纂事業を行っている。これら文献資料集の性格は、主に後の中国学術文化研究の重要な工具書とされているものが多いのだが、大規模作品集である「文学大系」と同類のものといえば、古来《詩経》、《楚辞》と《昭明文選》が挙げられる。

近年、このような「文学大系」を名づけた作品集は、1935年趙家壁が編纂した《中国新文学大系》を嚆矢とせねばならない。内容としては20、30年代中国の新文学として、各ジャンルの作品を編集したものである。台湾において、この半世紀に、文学作品に関する大系的な形で編纂されたものといえば、本論が取り上げる三部の現代文学大系が最も重要視せねばならないものであると考える。その理由と実態について、以下で検討したい。

(一) 三つの文学大系の出版と編集について

まず本論が取り上げたい三つの文学大系について、それぞれの編集者、出版年次と内容分類について、簡単に説明を加える。

「中国現代文学大系」

編集者：中国現代文学大系編集委員会

編集委員：余光中 朱西寧 白萩 痲弦 梅新 洛夫 聶華苓 曉風 葉維廉

内容：1950年～1970年までの小説（4冊）

出版社：巨人出版社（1972年）

「中華現代文学大系」

編集長：余光中（以下各ジャンルにおいて、編集者が異なる）

詩：張默 白靈 向陽

散文：張曉風 陳幸惠 吳鳴

小説：齊邦媛 鄭清文 張大春

戯劇：黃美序 胡耀恆 貢敏

評論：李瑞騰 蕭蕭 呂正惠

内容；《詩卷》2冊，《散文卷》4冊，《小説卷》5冊，《戯劇卷》2冊，《評論卷》2冊

1970年～1989年台湾で発表された代表的作品または評論である。

出版社：九歌出版社（1989年）

「中華現代文学大系」

編集長：余光中（以下各ジャンルにおいて、編集者が異なる）

詩：張默 白靈 向陽

散文：張曉風 陳幸惠 吳鳴

小説：齊邦媛 鄭清文 張大春

戯劇：黃美序 胡耀恆 貢敏

評論：李瑞騰 蕭蕭 呂正惠

内容；《詩卷》2冊，《散文卷》4冊，《小説卷》3冊，《戯劇卷》1冊，《評論卷》2冊

1989年～2003年台湾で発表された代表的作品または評論である。

出版社：九歌出版社（2003年）

(二) 取り上げる理由について

第一の理由について：

中国では清朝晩期以来、作者の創作、または読者の文学現象に対する論評活動は、およそ、創作 発表 出版という順序になっている。全時代の文学現象を捉えようとする、一般的に以上の各過程において検視すべきだが、最終的に出版物を通じて調査することが、その時代の文学発展の実態を把握しやすいと考えられる。出版といえば、当然さまざまな手順が必要とされる。創作から編集、印刷、出版社の商品として、読者と出会う機会をもたらすのである。作者と出版社の共同生産であり、読者が消費者であるため、基本的に営利的関係はあるが、文化的事業でもある。出版物

は文学の発展に大きく影響すると同時に、一時代の文学現象を考察するには、好都合な材料であると考えられる。

台湾社会は、日本植民地時代以来、常に急速な変化をしいられ、政治支配の闘争が激しく、それぞれ違った支配力によって、文学発展の過程も実に波乱万丈な道のりを歩んでいる。厳しい政治、文化の環境が改善されない限り、これからも模索が続くであろう。だが、日本植民時代以来、厳しい文学環境が続くなか、文学の創作または出版事業は、決して消極的ではなく、台湾と言う特別な政治的立場からは、逆に文学環境にとって何度も政治支配の要素が変わるたびに、新たな展開へ動くチャンスをもたらされたのである。この点に関して、本論の重要なポイントでもあるので、後に触れることにする。結果的に、多様な文学ジャンルも生まれ、出版事業もある意味で、文学の発展の一役を担ったと考えられる。

新しい台湾の文学の流れと進展を研究する場合、その発展が形になった時期から見る必要がある。その時期と言えば、やはり日本植民時代からと考えられる。そして現代台湾文学の発展過程を研究する際の材料として、特定の個人作家の作品を対象にすることを除けば、日本植民時代から現在に至るまで、常に数多くの選集が出版されている。このような選集について、よく見られるのは各出版社による年度別の「文学選集」と大がかりな「大系」類である。当然各選集にはそれぞれ独自の評価基準によって編集されたものであるが、観点の相違があっても、理念に基づくよい作品を選別する事実には変わりはないので、時代の記憶として、貴重な文献資料であると考えべきであろう。一方年度別の選集に比べて、大系類の総集は、かかる人力も時間も物力も大変だけではなく、その編纂の仕方にも特徴があることに注目したい。

冒頭でも言及したように中国において、歴代の王朝は文献資料保存のため、国策として重厚な文献類書を時代ごとの編集事業を行っている。ここで取り上げたい「文学大系」の編纂者は国策行事ではないが、古来の伝統に基づいて生まれたものであると言っている。当然作品総集を編纂する際、それぞれ作品の創作環境及びその時代の文学観がはっきり示唆されるであろう。例として中国で最も古い文学作品集は《詩経》と《楚辞》であるが、本論が取り上げたい三部の「現代文学大系」の文学作品総集は、後に中国の南北朝時代に、梁朝昭明太子が編纂した初めての詩文総集《昭明文選》の編纂主旨の精神を、引き継ぐものであると考えられる。《昭明文選》は中国文学史において、文学作品の総集の祖師であることは一般的に認識されている。この総集の存在は、後世の中国だけに留まらず、日本にも多大な影響をもたらしたことは事実である。その編集方法は、従来の単一的ジャンルの作品集ではなく、断代的に全てのジャンルの作品を集め、選別し編纂したものである。総集であるため、その時代における全ての文学ジャンル、それぞれの時代性と発展特徴、さらに文学の流変についても、より全体像が鳥瞰できるのである。本論で検討の対象である三部の現代文学大系の編纂の仕方も、《文選》同様、この時代にある全てのジャンルの作品を収集し、厳しい選別段階と手順を経て、編集されていると言える。

第二の理由について：

本論で検討の対象である三部の文学大系に収集された作品の時代は、以下のとおりである。

「中国現代文学大系」は1950年～1970年で発表された作品である

「中華現代文学大系」は1970年～1989年で発表された作品である。

「中華現代文学大系」は1989年～2003年で発表された作品である。

年代別で見れば、この三部の総集は1950年から2003年まで中断することなく、継続して編纂されたものであることが明確である。時代を反映する意味において、連続性があることは、とても重要な条件である。更に、 から までの編集期間が15年ほどの間隔があるにもかかわらず、それぞれのジャンルについて、編集責任者もほとんど変わっていないことである。同じメンバーであることは、前回の選別作業に携われれば、当然全ての作品に目を通すことになり、そして同じ主旨を貫くことができる、更に全体的文学の流れと意識の時代変化に、敏感な洞察ができるのではないかと考えられる。

実際に、この三部の大系が出版された50年代から現在までの間、多様な総集が同時期において、多くの出版社から出版されている。例えば《新世代小説大系》(希代出版社)、《現代中国小説選》(洪範出版社)、《現代中国詩選》(洪範出版社)、《中国近代小説選》(爾雅出版社)、《台湾当代小説精選》(1989新地出版社)、《光復前台湾文学全集》(1979遠景出版社)、《当代中国新文学大系》(1980天視出版社)、《本省籍作家作品選集》(1965台湾文壇出版社)、《中国新文学創作叢刊》(1979智燕出版社)、《日据下台湾新文学 明集・潭集》(1979明潭出版社)のものがあるが、名称からわかるようにおおむね「小説集」、または「詩集」であり、あるいは特別な内容と創作背景の作品を限定したものである。継続して、創作理念と思潮の流れに沿った、全時代をカバーできる総集は、おそらく今の時点では、この3部の総集に限定されるのではないかとと思われる。この点に関して、これらの大系を取り上げた理由であるが、同時に本論が検討したい問題点の一つでもある。

(三) 三つの文化大系の内容に見る台湾社会意識流変の実態と問題点

この三部の文学大系の編纂に当たって、総編集長を務めるのは、3回とも作家でもある文化人の余光中であり、その総序文は全て余氏が書いたものである。1972年最初の「中国現代文学大系」を出版して以来、3回目の「中華現代文学大系」を出版するまで、約30年以上経っている。余氏はこの三部の大系の編纂に携わり責任者を務めている。台湾文学の発展と変動、作品の選別の過程とおして、その実態が確実に把握されたであろう。ここで彼が書いた序文を基に、文献資料を参考にしながら問題点を検討してみたい。

(1) 作品数と選別の流れから見る問題点

まずこの半世紀において、文学作品の創作の実態はどうなっているのか。それぞれジャンルの消長は、社会において何の意味付けをすべきなのかを考えてみたい。

1. ジャンルにおける時代的变化について

1989年版の《中華文学大系》の編集範囲は、1970年より20年間、台湾で出版された代表的な作品で、ジャンルは「詩」、「散文」、「小説」、「戯劇」、「評論」の5分類で合計15冊になる。その前の1972年に出版された《中国現代文学大系》と比較すると、「戯劇」、「評論」の2ジャンルが新設され、そして共通する「詩」、「散文」、「小説」類を見れば、入選された作者の消長状況が明白である。

1972年版の《中国現代文学大系》に入選された詩人は70人いるが、そのまま1989年版の《中華現代文学大系》の詩人99人のうちに残されたのが約3割の28人である。散文については、1972年版の《中国現代文学大系》に入選された作家は67人中、17人がそのまま次の1989年版《中華現代文学大系》の90人のうちに再入選されている。小説類については、1972年版の《中国現代文学大系》に97人の入選者がいるが、そのうち次の89年版の大系の作者の70人中、再入選されたのは24人である。以上の結果を見ると、1回目の大系から2回目の大系の編集までの20年間、詩人と小説作家陣営の変動率が低く、新旧交代の伝承状況も一般的に言えば、安定しているように思われる。最も変遷が大きいのは、散文作家の交代である。

作家の年齢をみると、1989年版の大系は、詩人の平均年齢が43.4才、散文作家は48.5才、小説家は46.4才になっている。年齢の平均差はそれほど無いが、やはり詩の創作は比較的に若い世代が多い。散文の創作はかなりの人生閱歴が求められるので、年齢層が高くなることも当然であろう。そして小説の創作については、まさに中間的位置づけになると考えられよう。少なくともこの大系の入選者の最高年齢をみれば、明らかであろう。詩人の最高齢は68才、小説家は70才、散文作家は92才が最高齢になっている。

作家の流変について、さらに15年後の2003年版の大系を檢視してみると、次のような結果になる。2回目の1989年版の大系に、詩人は前の（1989年版）大系の99人の入選者のうち、そのまま残留しているのは、55人に過ぎない。散文作家は前大系の入選者の90人のうち、31人しか残っていない。小説作家は、前大系の入選者の70人中、再入選されたのは26人だった。評論家は、前大系の入選者の60人から、43人が落選され、残ったのは17人である。劇作家については、前回の大系の入選者から、全員交代されたのである。

作品数を比較するには、1989年版の大系と2003年版の大系の構成と編集形態がほとんど相違ないため、適切な比較ができると考える。1989年版の大系では、詩2冊、散文4冊、小説3冊、戯劇2冊、評論2冊全部で15冊である。2003年版の大系は詩2冊、散文4冊、小説3冊、戯劇1冊、評論2冊全部で12冊である。二つの大系に3冊の差は、小説が2冊減ったのと戯劇が1冊減った結果である。そのほかのジャンルを含めて、全体的に見比べると、2003年版の大系には、もっとも最大の分類になったのは、散文ジャンルであることが明確である。この結果においては、散文の発展が、時代の変動に伴い、突発的な成長とは考えられないが、衰弱する傾向は無かったではないかと思われる。

2. 数字的現象から見る「散文」における位置づけの特徴性

その1：散文の中国文学における位置づけは欧米文学と異なるのである。英米文学では、最も注目されるジャンルは、小説、詩、と戯劇の順になっている。評論家からは、台湾で流行している叙情的散文類は、特に論外視されるのが一般的である。総序を書いた余光中はこれらの散文を英語で Prose と訳しているが、一般的に非英文圏社会では、回想録、遊記、新聞雑文、書評、論文などが散文と説明されている。しかし、中国文学において、散文は古典文学のもっとも主流的な存在だったのであり、五四運動以来、依然として不動の地位が維持されている。今日でも台湾文学の柱的存在であり、多数の作家を輩出し、広範な読者層の支持を得ている。だがこの発展とは反対に、評論される対象として、あまり注目されていないようである。これは2003年版の大系を見れば、評論巻の66篇文章のうち、散文を評論の対象にしたのは、8つしかなく、同巻に小説に対する評論文は23もあり、詩に対して19もあったのである。その理由について、余氏は散文は平実的なことを書くのが中心で、小説と詩が創作の技巧などを競い合うようなことはない。また評論家たちの多くは、その理念は、欧米の伝承にもとづくところであったため、欧米に欠ける伝統の散文について、批評することは難しいと説明している。中国文学における散文ジャンルの存在の位置づけから、散文が台湾社会を担った重要な役割は無視できないのである。

その2：これまで三部の大系の散文巻の編集は全て女性作家が担当していた。それだけではなく、3番目の大系の散文巻74人の作者のうち、女性が34人いるのである。同大系の小説巻作家66人のうち女性が26人、評論巻には62人の作者のうち、女性は23人である。戯劇作家では女性のいない実際の数字から見ると、散文における女性の活躍は無視できないであろう。

一方、女性作家が多い事実は、台湾の散文発展の実態とも関係あると考えられる。何寄澎「当代台湾散文的蛻変」の論文に、50年代以降、台湾散文の発展がもっとも顕著な時期は80、90年代であると指摘している。民国以来、国勢の必要に応じて、文化社会の改革意識を担う実用性が主流で、叙情的内容が弱勢であった。50年代以後、政治の禁忌と文芸政策の主導により、五四以来の写実的伝統よりも人生、家族愛、郷愁、友情などについて叙情的テーマが主流になった。この風潮は女性作家による散文世界の広がりが見られる重要な背景であろう。その後、台湾社会に郷土文学論争が始まり、より社会に密着した現実描写が重要視されるような創作が多く見られるようになったのである。しかし台湾の散文の本当の現代化は、やはり80年代以後を待たなければならない。その理由と背景には台湾政治の民主化の推進、社会の開放、価値観の多元化、都市の興起、農村の消失、更に情報社会の発達、作者、読者、評論者の役割が激しく入れ替わり、文学に多大な影響を与えたのである。当然この背景は全ての文学ジャンルに対しての変化の要素になるのだが、散文に関して、これまで伝承し続けた写実性と叙情性の枠が突破され、創作に無限な可能性をもたらされたのである。何寄澎がその論文^{注1}に台湾の散文の精神と特徴について、一言限っていえるならば、「変」ではないかと断言している。そして新世代作家の堀起は、新言語と新形式は時代風潮に沿って生まれ、文学発展の法則から見ると、常に必要とされるのである。しかし現在の新世代の作者たちには、中心的理念が消え去り、時代潮流を追うための変化だけが目立つ。個人的意思を勝手に思いのままの

語りと裏腹に、マイナス的要素も見え隠れできなくなるのではないかと指摘している、これはまさに台湾社会の現状の一側面の現われであるとも考えられよう。

(2) 作家の社会的背景から見る台湾社会意識の変遷

1972年版の大系に、主編者の余光中は当時の台湾社会の作家たちの社会的背景について、入選作家を「軍人」、「女性」、「本省籍」、「学府」4種類に分けたのである。このわけ方からは、実に台湾社会の進化過程を考察するにおいて、極めて重要な視点であると考えられる。ここでは特に台湾社会の特徴的存在の軍人、本省籍の作家、及び成長が目覚しい女性作家について、見てみたい。

1. 軍人作家の存在意義について

軍人作家の出現は、決して一般的現象とは考えられないであろう。彼らの出現の背景には、当時の政治的要素が強く働きかけられたことは言うまでもないが、かなり優れた作品を多く創作したことも事実である。彼らは戦後大陸から台湾に政治的理由で、移住したという特殊な社会背景を持つ特別な集団である。この集団の存在はその後台湾社会において、政治、社会、文化問題に、多くのかかわりを持つこととなる。

50年代をはじめ、国民党支配の政局も安定して、教育の普及で、軍人社会における文芸政策の推進により、軍人読者が増え、軍人作家の作品が量と質ともに優れた存在感を得ている。その20年間、当時の文壇に注目されるほど傑作も少なくない。生活経験の豊富さと職業的精神による民族意識の高い資質が、彼らの作風に雄大豪快と沈鬱悲楚の両面性をもたらしたであろう。だがその後の20年間は、彼らの存在が時代の波に流され、埋まれてしまったのである。平和が長く続くことで、戦場の殺伐した氣勢と経験はすでに幻となり、非現実的世界となってしまったのである。1987年に実行された大陸への返郷政策によって、新たな現実世界が目の前に露呈され、大陸家郷の記憶も淡化されてしまったのである。題材が続かない以上、良い作品の創作は生まれない。軍人作家自身も年齢増によって退職し、普通の文人作家と区別がつかなくなったのである。後に個別に優れた軍人作家の創作活動は続いてはいるが、全体的に見れば、もうこの作家集団は、既に過去の歴史であり、文学史において、特別な存在としてみる必要がなくなったのである。しかし、軍人作家の台湾文壇における存在と活躍があったという事実は、台湾の歴史、文学、社会の特徴的背景が産出した現象であり、多方面において、台湾社会に重要な意義をもたらしたことは、決して無視できないであろうし、台湾社会構成の変動と流れの過程を示唆する重要な要素であったと考えられる。

2. 本省籍の作家の位置づけについて

1972年版の大系に、総編集者の余光中は本省籍の作家について、日本植民地経験と方言の背景^{注2}により、本省籍の作家は文壇への出遅れを見られるが、その成果については、無視できない。更に彼らの成果を見ると、小説が最も大きいであるが、散文では取り上げるほどの価値が無いと指摘している。しかし20年後の彼は当時の自分の論断について、新たに考える余地があると説明を加え

たのである。1972年当初、大系を編纂する時点で、彼も後にこのような変化が起きるとは、到底想像もできなかったであろう。

1989年版の大系と1972年版の大系を比較すると、本省籍の作家の進展実態が明確である。72年版の大系において、本省籍作家の数字は以下の通り。小説の入選者97人中36人、詩は70人中20人、散文67人中10人に過ぎないが、20年後の大系では、小説入選者70人中31人、詩90人中45人、散文90人中27人、戯劇10人中1人、評論59人中19人である。この数字には特に散文ジャンルの活躍が増大したことに注目すべきであろう。その発展の基盤になるのは、50年代以来始められた漢語教育の推行が時間をかけて実った成果であると考えられる。さらに70年代の郷土文学論争が盛んに行われた環境からも、農村社会を描写する作品は、以前の素朴的創作よりも意識形態化されたのである。世界情勢の変動から見れば、この時期は、まさに台湾社会が世界舞台において、挫折と排除を受ける時期である。本土化意識の高揚が創作の意欲に拍車をかけることになったであろう。

(3) 創作題材選択の実態から見る時代の変遷

総編集者の余光中は、最初の1972年版大系の序文に、ここ20年間、作品創作題材の選択と時空の交差実態について、概ね中国大陸、台湾、海外の三大類型であると考えられる。そして2回目1989年版になると、内容的にはこの分類はそのまま適用されるのだが、実際の創作量を檢視すれば、あらたに台湾、中国大陸、海外の順番に変わったと指摘している。この実態は、まさに約40年間台湾社会住民の意識変動の実態を反映するバロメーターであるといえるであろう。

1. 1972年版大系における題材選択の実態と問題点

上述50年代、60年代において、大陸、台湾、海外の類型を深く検討すれば、「中国大陸」を題材にした作品の内容は、当時では特徴的存在だった軍人作家と年配の外省人（1949年以後台湾に移住した人々）作家が懐郷の心情を語る作品が中心である。そしてジャンルとしてみれば小説、散文類が多かったのである。「台湾」を題材にした作品は、内容の面では、大陸への過去の回憶とは対照に、当時台湾の「現在」を描写している。さらにこれら作品の作者には、本省籍の作家が目立つことに注目すべきであろう。「海外」を題材にした作品の内容について、いわゆる「留学生文学」が多く見られるのである。この時期の文学の文化的価値を考えれば、中国大陸に対する回憶は、中国の社会の特質を検討するのに対し、台湾の現実を描写する作品は、農業社会から工業社会へ進展する過程の価値観の変動を探っている。海外をテーマにした作品は、中西文化の衝突を鋭く観察し、思考するところであろう。

2. 1989年版大系における題材選択の実態と問題点

1989年版の大系では創作の題材が前回と比較して、台湾社会をテーマにする作品がもっとも多くなっている。その背景には70年代から80年代の間に、台湾地域において、政治、社会の変動が極めて大きいことを示している。

この時期の台湾生活を題材にする作品には、地区と形態から「郷土」と「都市」に分類できる。70年代に入り、台湾の農業と工業または農村と都市の消長が加速化されている。1968年に製造業の生産値が農業を超過する状況になり、その翌年からは、農業のマイナス成長が始まったのである。70年代末期になると、工業製品が総輸出率の9割に占めるようになった。農民の所得が非農民の6割に過ぎない。こうした抽象的数字を、文学として表現したのが当時のいわゆる郷土文学であろう。この20年間は、郷土小説の風貌が多变的であるのは、まさに台湾社会の重要、且つ生動な変遷の検証であると余光中は総序文で指摘している。

一方、この時期に、台湾社会の開放が進み、なかでも1987年の政治戒厳令の解除、さらに政党禁令と新聞発行禁令の解除により、政治参与の風潮が高まり、政治問題に関する創作、いわゆる政治詩、政治小説なども出現したのである。更に、この政治的要素によって、影響をもたらした中国大陆を題材にした創作に対して、注目する必要があると考えられる。

政治戒厳令の解除に伴い、戦後に政治的理由で台湾に移住した人々の親族訪問、言い換えれば里帰りが盛んに行われたのである。1950年までの「国共内戦」後、中国大陆と台湾の間の交流が禁じられた70年代までは、ふるさとの懐郷の文学が中心だったことは、既に述べたのである。が、大陸との交流が解禁された後には、一転して、40年後の帰郷経験にまつわるテーマが多く出現したのである。またこの時期の若い世代の作家も、当初この政治情勢にかかわった庶民たちの人生経験に対して、関心をもった創作を行うようになった。さらに両海岸間の接触があらゆる分野において、増加し続け、緊密なつながりを持ち始める。文学の世界に限ってみれば、出版の手段を通して、両方の文学作品を相互に紹介し、双方の作家たちには発表する機会が増加し、読者として、一般庶民層にもつながりを持つようになり、作家と作品の枠が広義的に、台湾以外の地域、海外まで広がったのである。現にこの大系の300人の作家のうち、台湾以外の作家は約2割を占め、極めて重要な位置にあるのは事実である。この数字は60年代を超えていることも明らかである。この現象が継続された結果、自然的に次の大系の編集時期における、その編集基準、つまり台湾文学に対する位置づけが、あらたに考量する必要性をもたらしたであろう。当然この現象は、単に台湾の文学が「台湾文学」という概念を確実に成立するだけに留まらず、台湾社会においても、台湾という地域性を住民意識のなかで、より明確に定義され、定着し始めたのではないかと考えられる。

(四) 2003年版大系の編纂の特徴から見る台湾文学の問題点

72年と89年版につづいて、3回目の大系の編集に、台湾社会の激的な変化が、住民意識に大きな変化をもたらしている。外への関心よりも自分たちのこれからの生存空間を確実に獲得しようと考え始めたのである。この方向転換は確かに台湾文学に限らず、台湾自体か中国という大きな視野において、如何に生きるかにかかわる問題でもあったのである。ここでまず50年代から、台湾で発生した大きな事件を検証しながら、「台湾文学」と「台湾社会」としての意識の確立において考えてみたい。

(1) 時代別の事件と台湾社会における影響について

ここで1949年以後における台湾社会の政治事件を提示しながら、その事件にかかわった文学社会の変化を見てみたい。それぞれの時期に対して、時代を表すような作品を同時に提示するが、作品についての説明は省略することにする。

1. 1952年日本語・台湾語教育の禁止がはじまったのである。

この政策により、台湾を一つのまとまった地域として、歩み始めるスタートラインでもあったといえよう。この時期の特に注目したい作品は呉濁流の「アジアの孤児」、姜貴の「旋風」などが挙げられる。

2. 1966年大陸で文化大革命が始まる。

この時期は大陸にとって暗黒な時代ではあったが、逆に、国際社会において、中国文化の代表として、台湾地区は大変重要視され、経済、文化ともに発展し、恵まれた時代でもあったと考えられよう。この時期の特に取り挙げたい作家は台湾省籍の黄春明である。作品に台湾という土地を強調し、その意識を固める役割を果たせた一人である。以後台湾省籍の作家たちが、文学界で頭角を現すことになった時期である。

3. 1971年中華民国（国民党台湾政府）が国連退出になる。

このことは台湾にとってもっとも打撃が大きな事件であった。それ以来、台湾という政治歴史、文化の方向が迷宮いりになったように、常に探っているように思われる。

4. 1972年中華民国と日本の国交断絶。（日中国交回復）

5. 1977年中華民国とアメリカの国交断絶。（中米国交回復）

この二つの事件は台湾にとって国際社会での孤立がはっきり示されたと考えられる。当然台湾住民は大きなショックを受けたし、同時に、真剣に自分たちの国際社会における居場所探しをはじめ、自分たちの存在価値を考えなければと、自分を見つめなおすチャンスになった。文学界においては、1977年台湾本土化として、郷土文学論争が始まったのである。

6. 1978年蒋介石の息子蒋経国が総統に就任する。

1978年中国は公式に改革開放政策を表明。

この時期から、中国大陸と台湾両側ともに、接点を作ろうと努力したと思われる。硬化した関係を、一斉に和らげたいと考えたのである。この時期に文学界において最も注目したいのは、政治的開放である。長年にわたり言論の自由を禁止され、政治思想の罪で抑圧された人々も自由に発表できる環境になったのである。1981年政治思想犯として禁固された李敖の政治歴史に対する評論「千秋評論集」が出版されたことは、時代風潮と台湾住民意識の方向転換を示唆したと言っても決して過言ではあるまい。

7. 1984年趙紫陽総理は台湾政策として、「一国両制」と発表したのである。

改革開放政策の実行と同時に、台湾住民の不安を除くための「一国両制」政策の発表以後、中国と台湾の関係が変わり始め、疑いを残しながらも、ついに台湾の方も大陸に対し、態度転換の気配を見せ始めたのである。その具体的政策はその後の台湾政府により実行されたのである。

8. 1987年戒嚴令を解除。同時に中国大陸への親族訪問を開放する。

この時期に中国大陸が台湾に対し好意を示し、兩岸住民の相互訪問のチャンスを与えたことにより、台湾側もその政策に答え、人的交流を認めたのである。それは単なる政治統合への狙いではなく、文化として、もう一度合流を試みたかっただけではないかと思われる。そして台湾側の住民は、文化的に中国とのかかわりを否定できない現実をもう一度真剣に考え、自分たちがこれまで台湾という地で歩んできた痕跡を、「台湾文学」の名称として、中国文学において、はっきり位置づけをさせたのである、その証拠として、1987年葉石濤の《台湾文学史綱》の出版に重要な意義を持つと考えられる。

9. 1988年新聞発行の禁令を解除。

中国が開放政策を実行して以来、兩岸ともに社会の潮流の方向修正をし、互いに交流できるような政策を目白押しに打ち出したのである。文学界の交流も当然そのルートに乗り、発達したのである。1989年蔡源煌の《海峡兩岸小説の風貌》という著作が出版されたことは、この時期台湾と中国大陸における文学の接する実態を物語っているであろう。

結局台湾文学の発展方向は、こうした政治的背景に大きく左右されざるをえない性質を持っていることを否定できないであろう、台湾という名称を強調したにもかかわらず、作品の内容、使用する言語、文字、全て「中華」という文化背景を基盤に成り立っていることは明らかな事実である。

10. 1990年国民党李登輝總統就任する。

11. 2000年初めての政権交代として民進党の陳水扁が總統に就任。

1990年以後は、台湾社会は完全に民主化の道を歩み始めたのであるが、一般民衆の教養が不成熟であるため、これまでもたびたび政治闘争による社会問題を巻き起こし、社会に不安を与えたのである。しかし文学において、政治的束縛がなくなり、作家が台湾社会により密着した創作を始めた傾向も見られ、台湾社会の多元性も隠れることなく語ることができ、より豊かな世界を作り上げたのではないと思われる。

台湾文学の定位について、1999年五四新文学運動80周年を機に、台湾文学にとっての經典的作品を決める動きも見られたのである。その年、台湾文学に対し、政治要素に惑わされず、「台湾文学經典研討会」が実際に台湾文学の定義と立場を探索し、台湾文学の主体性を確立するために開かれたのである。この現象も台湾文学の今後に重要な意味をもつではないかと考えられる。

以上の歴史背景から、台湾住民は以前と違って、台湾社会の現実に目をむけるようになり、真剣に自分たちの生き残る道を模索し始めたのである。しかしこの現実に見え隠れていた問題は、なんと言っても台湾自体の定位の問題である。社会が開放されたとはいえ、この問題は依然として、解決の道が開けていないのも事実である。当然これは政治だけの問題に留まらず、同時に台湾文学の定位問題でもあることは、現在の台湾社会において、誰でも承知することであろう。中国大陸と国際舞台での地位争いも、早く世界の注目から外されたことも事実である。世界のまなざしに対し、台湾政府も必死に自己主張するが、特に民進党の台湾独立を掲げる政治方針は、文化的偏激的方向へと走りがちになる。いわゆる台湾の独自性が曖昧になり、独走が逆に自分たちを孤立の立場に追

い詰めてしまう結果になるのではないかと、懸念する気配も見られたのである。政治の利権と関係なく、文化的に「台湾的」ということは、一体何なのかを見直さなければならない時期に迫ったのである。その証拠として、2003年版の大系の小説の選別基準に、かなり大胆な理念転換がみられ、そして編纂される際、台湾の歴史的現実を正面にすえて、その特徴ある地域性を明確に提示したのである。これから自分たちの国際的将来性を考慮して、意図的に選別の基準を広げたのである。その実態について、小説巻を取り上げ検討することにする。

(2) 2003年版小説巻の選別基準の特徴性と意図について

上述の内容から、台湾の社会意識の転換に、一つの方向性を示唆したのは、この3回目の大系の小説巻の選別を担当する馬森の立論に注目せねばならないであろう。

馬森はその小説巻の序文に、作品の選別基準、作者の背景、作品の主題と風格について、丁寧に明確な論点で説明している。特に注意するところは、作家の出身と作品とのかかわりの実態に配慮をしているのである。台湾の文学作品を選出する場合、その作家の地域性について、単純にいわゆる台湾地域に住むことを条件にすれば、台湾文学の流れに支障がおこるのであろうし、台湾文学の現実性に欠けるであろう。例を挙げれば、台湾で生まれ、教育を受け、作品は主に台湾で発表されている、かつ台湾の読者もかれらをよく知っている。しかし作家本人は台湾以外の地域に住み、場合によって、外国の国籍さえ持っている例も見られる。だが、作品は中国語で書き、創作活動として、常に台湾で発表または出版されている。さらに台湾の文学界において、その創作活動と作品が目目され、評論の対象になり、もしくは台湾の文学賞を受賞する実績があるであれば、たとえ外国の国籍を持つ、または台湾地域以外のところに居住している事実があっても、台湾文学として、見るべきだと、馬氏は考えたのである。よって、この小説の巻に関しては、中国大陸出身者、香港、マレーシア国籍を持つ作家なども選入されている。この結果は当然馬森自身の社会背景にも理由があるのだが、しかし、こうした思考と認識は、もう文学だけの世界に限る現象ではなく、現在台湾社会における住民生活の実態の一側面であるのも事実であろう。ここで特に注意せねばならないのは、中国大陸とのかかわりと見方であろう。それは次の章で新たな問題点を見出す重要な鍵であると考えられる。

(五) 三部の大系の名称から見る問題点

三部の大系の編集範囲は、1950年から2003年までおよそ半世紀の年月がある。作品の選別の特徴及びさまざまな問題点に対して、説明を加えながら見てきたのである。この大系を通して、台湾社会の時代意識変遷の流れの痕跡があきらかになったであろう。さらに注目したいのは、半世紀における苦難を経験した後、台湾住民は、未来に対しての期待と考えをこの三部の大系の名称に、示唆していると思われる。

まず三部の大系の名称に相違するところに注目したい。1972年版の大系では、《中国現代文学大

系》と名づけている。そして次の1989年版の大系は、《中華現代文学大系》と名称を変更したのである。そして変更された名称は、2003年版の大系も引き続いて、使用したのである。1972年版の「中国」を「中華」に変えた理由は、2回目の大系の総序文の最後に、余氏は今日昔を見るのも、後に現在をみるのと同じことであろう。この大系を《中華現代文学大系・台湾1970～1989》と名づけたのは、まさに16名の編集者が一致して認識するのであり、この20年間台湾文壇の風格に変化が多くみられ、思想においても相違が多く現れたとしても、作家たちは米を食べ、端午節句と中秋節を親しむ。創作に中国語を表現の手段として使用していることは、相違ないのである。よって、この大系の位置づけを考えれば、当然中華民族という大きな視野に入れるべきであろうと語ったのである。この観点は、台湾文学に限っての思考ではないことは明らかであろう。同時に台湾社会の意識変化の実態と行方を暗示したとも考えられよう。

結 び

三部の大系は、2003年までの作品を対象にした選集を編纂したのであるが、それぞれの内容を単独で見ると、時代別に並べて検証すれば、時代の変遷の痕跡が随所に刻み込まれていることが明らかになるであろう。三部の大系がそれぞれ編纂する時代背景は、約半世紀以上の年月が経っているし、その上、台湾社会が経験した多様で衝突的な波瀾は、並大抵ではないことも事実である。それがそのまま文学創作の世界にも反映されたといえるだろう。

2003年以後の台湾は、政治的に台湾の独立を主張する民進党が政権を握り、台湾社会は一気に斬新さと期待に満ち溢れたが、しかし偏狭な視野と政治理念を無理して守ろうとした結果、政策も、文化制度の運営も「中国色」を感情的に排除する方向へと変則的に通そうとしたのである。まだ記憶に新しい、漢語ピンインを「中国的」と考えるため、国語教育または一般使用に取り込めない問題もその一例である。このような現実性を無視する、感情優先の政治的対立は、その根底に、台湾政権を共産主義色に染めたくない本音も理由のひとつであろう。台湾住民にとって、やっと手に入れた台湾の民主化を失いたくないであろう。中華文化で生きながら、「中国」を拒む矛盾体制が特に民進党政権になってから、顕著になったのである。

結局民進党が2期の任期も終わらないうちに、自分たちが掲げた理念に反する不祥事が次から次に暴露され、2006年9月現在、まさに指導者の汚職疑惑によって、辞任を求められ、台湾中に激的な民衆運動が起きている。政権側の民進党も無理して自分たちを守ろうと、汚職の疑惑問題に触れないように、支持層へ台湾を守るスローガンを掲げて、対抗しているが、そう簡単には民衆の納得は得られないため、現在台湾の情勢が一段と混乱に満ちている。このような変動が起こるたびに、結局台湾社会に存在する様々な摩擦の要素が常に政治に利用されるのである。だが、台湾の住民たちは、政治社会の経験から、もう単純に族群問題などに惑わされなくなるのも、明らかであろう。新政権に対する期待はずれは、経済的低迷、庶民生活の格差の深刻化など、台湾の未来に影を落としている。政治的不祥事により、今日、民進党内からも結党当時の「台湾独立」の理念と路線を、

大胆に見直す気配も現れている。結党に参加したベテラン政治家康寧祥氏がいう民主社会を守りながら、中国大陸ともうまく付き合うバランスが求められているという考えは^{注3}、もっとも現実的で合理性があり、将来的台湾社会の意識を大きく示唆している面もある。

政治も文学のように、広く視点を変え、中国という文化に包容しながらも自分たちの特色を示せば、決して自己をなくすことは無いはずだが、文学大系の名称を「中国」から「中華」に変えたのも、台湾地域だけの問題提起ではなく、中国大陸に対しても、そうした広い文化意識を包容しながら、ともにより豊富な文学世界を築こうとするのであろう。「中華現代文学大系」という名称を基に、新たな台湾文学の方向と理念を提示したものである。同時に台湾の政治社会において、住民たち自身にたいして、今後はより大きく国際社会における存在と定位される方向を提示したのではないかと考えられよう。

注 釈

1. 何寄澎「当代台湾散文的蜕变」2000年「戦後50年台湾文学国際研討会」論文発表。
2. 本省籍の人々は、日本の植民地支配により、漢語教育受けてないため、植民地支配が解除された後、漢語で文章の読み書きできないという事情がある。
3. 2006年9月27日 朝日新聞

主な参考文献

- 中国現代文学大系 小説 1972 巨人出版社
中華現代文学大系 1970～1989 1989 九歌出版社
中華現代文学大系 1,989～2003 2003 九歌出版社
台湾当代小説精選 1945～1988 1989 新地出版社
台湾文学この百年 藤井省三 1998 東方書店
台湾文学風貌 李瑞騰 1991 三民書局
台湾文学論 許俊雅 1997 国立編訳館
兩岸關係変遷史 張讚和 1996 周知文化出版
台湾文学經典研討會論文集 陳義芝主編 1999 聯経出版社
台湾文学史綱 葉石濤 1996 文学界雜誌社
台湾文学的歴史考察 林瑞明 1996 允晨出版社
臺灣文學本土論的興起與發展 游勝冠 1996 前衛出版社
戦後台湾新世代文学論 朱雙一 2002 揚智出版社